



# さらしなの里



## 友の会だより

第15号

2006・秋

縄文服を自分でつくる



猪の肉と一緒に串に刺すネギ畑の草取り

縄文葉草茶用のドクダミを採取



### 縄文まつりで「ふるさと学習」

更級は古今和歌集や更級日記が著された奈良・平安の時代から風光明媚なところとして都にも名を知られ、「いつかは行ってみたいあこがれ」の場所だったそうです。ところが、地元に住む我々は日々の生活に追われて意外とその豊かな自然に気づかなかつたり、先祖伝来受け継がれてきた歴史文化や伝統や人と人とのかわりを知らないまま、やがて故郷を離れていってしまうこともあるのではないだろうか。

本校では「ふるさと更級」を将来にわたって大切にできる子どもの育成を願い、低学年の生活科、中高学年の総合的な学習の時間の中で、「更級」にかかわる自然、文化、伝統、もの（歴史、地理、産業などを含む）、人と人とのかわりを、年間五十時間程度学ぶ「ふるさと学習」を位置づけています。

縄文まつりも十年ほど前から、高学年児童を中心に鼓笛隊や豊穰儀礼に参加していますが、本年度から、さらしなの里友の会やさらしなの里歴史資料館と一層、連携を強め、この縄文まつりを、事前の学習を深めて学校全体で参加する「ふるさと学習」の一環に位置づけました。

本校では「ふるさと学習」を通して子どもたちが「更級」をよりよく知り、そして、地域のみなさんと仲良くなつて「一緒につくる縄文まつり」にしたいと思っています。そして美しい更級の自然、文化、伝統や人と人とのつながり（人情）を受け継ぎ、将来にわたって「ふるさと学習」を大事にできる子どもたちに育ってほしいと思っています。

（更級小学校校長・石井智）

# 初代更級村長が残した宝物公開

羽尾地区の宝物が五月七日、一般公開されました。明徳寺に保管されているもので、旧更級村村長の塚田雅丈さんが寄贈したものが中心です。当地が古来、都の人などによって歌に詠まれてきた「更級」であることを世間に知らせた執念の品々といつていいものです。



雅丈さん（写真下）は江戸時代の嘉永元年（二八四八）、羽尾村に生まれました。明治の町村合併の際は、お隣の若宮、須坂両村と一つになるにあたって新しい村の名を「更級」にするべくリーダーシップをとった方です。

宝物のいくつかを紹介します。まず、九谷焼大皿です（写真右）。真ん中に冠着山と更級村一帯が描かれています。二枚つくり、一枚は明治三十四年（二九〇一）、国政に携わっていた当時の有力政治家の近衛篤磨が雅丈さんの家を訪ねた際に、プレゼントしたそうです。裏には佐久間象山の和歌「わがくにの冠着山に見る月はカルホルニアのあけぼ

のの空」も書かれています。象山は江戸幕末、松代に生まれ、欧米諸国の地理や産業技術にも通じていた人です。冠着山に月がかかったときは、アメリカのカルホルニアは朝を迎えているという意味でしょうか。月を眺めながら地球の反対側もイメージした視野の広い歌です。

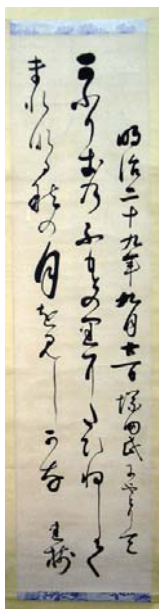
もう一つは大和田建樹の書による歌の掛け軸です（写真左）。「かむりきのふもとの里に旅寝してまれなる秋の月を見し

かな」。大和田は「汽笛一声新橋を…」の歌詞で始まる「鉄道唱歌」をつくった人で、歌人としても名を知られていました。

ほかにも冠着山の水彩画や詩歌の掛け軸など、当時の文人墨客たちの手によるものがたくさんあります。当地を訪ねた彼らが

雅丈さんの家に泊まった際に描いたり、詠んだりしてもらったものだそうです。いわゆる一宿一飯の恩義でしょうか。雅丈さんが自分の屋敷で営んでいた「月の井酒造」のお酒をふるまうことができたのも関係しているのではと、郷土史家の塚田哲男さんはおっしゃっていました。

また、雅丈さんのお父さんが江戸幕末、松代藩の兵役につくたためにつくった巨大な鉄砲もありました。ただ、これは開国を迫るアメリカのペリーの来航による日米和親条約の締結で結局、使われなかったとも塚田さんは解説してくださいました。時代を感じさせるエピソード



ドです。

羽尾の区長さんをはじめ役員、議員さんたちが作った宝物一覧の資料集がとても参考になりました。これらの宝物を「羽尾お文庫」と呼んで大事にしているそうです。同地区では八年前から史跡めぐりを毎春、行っており、今回の宝物公開もその一環です。地域史に対する区民の関心のほどがうかがえます。

ちょっと話がそれますが、私は語呂あわせで年号を覚えるようにしています。ひとつ覚えておくと、後は足し算や引き算をすればいいので便利です。

まずは雅丈さんの生まれた年。  
はよや（1848） 雅丈村おこし  
次に明治維新の年。  
やろうや（1868） 国の建て直し  
もう一つは更級村誕生の年。  
いやや（1889） 更級村

更級村は昭和三十年、戸倉、五加との合併で戸倉町となりましたが、更級村時代を含む当地の歴史上のトピックが「戸倉町の歴史年表」に詳しく載っています。さらしなの里歴史資料館で販売しています。（大谷善邦）

## 15回記念冊子を制作

さらしなの里友の会では、縄文まつりが来年、十五回を迎えるのを記念して、冊子「さらしなの里と縄文まつり」（仮題）を制作します。なぜ、当地の縄文まつりが盛んになったのか、そもそもどうしてこのまつりが始まったのかなどを盛り込みます。また、まつりを演出するプログラムについても紹介します。発行は二〇〇八年春を予定。ご寄稿や取材のお願いをしたいと思いますので、どうぞよろしくご協力ください。

# 今も行われる境巡り

大字羽尾地区の境巡りがいつから始まったのか定かではない。私も昨年より代理区長となり、区議員の方々のご協力をいただき、大きな年中事業である境巡りを行うにあたり賛否両論があり協議しました。

反対の意見には、財産として特にこれというものもない、また千曲市となった現在、その必要なし。従来通り境巡りはやるべきについては、若い者にも知ってほしい、ご養子に來られた方、他地域から來られた方にも知っていただくことが大切だ、ということで行行となった次第です。

何年前か前までは三回に分けて行っていたようですが、最近では二回に分け、毎年九月に行っています。昨年はまず、冠着山の頂上へ午後一時に集合。冠着神社に参拝、主務区長のあいさつの後、境巡りが始まりました。

しばらくはおもむろに坂井村と上山田の境を主務区長の案内に従い、倒木とバラ藪の中、境杭をさがし、かつ冗談を言いながら元氣よく歩きます。第一関門は児抱岩の下にきたとき。遠く塩崎あたりから見ると冠着山と児抱岩のなんときれいなことか。あんなにきれいな麓に住んでいることに誇りを持つていた自分が、この下にきたとき、一瞬心臓が高鳴るのを抑えることができなかった。ある記によると、高さは三十呎、幅十呎、厚



さ十呎はあるという。その大岩が今や抜け落ちて来はしまいか。と足早にそつと横切った。そしてずつと「永遠に鎮座していただくさい」と一人、心の中で手を合わせた。

尾根伝いに東に進むこと一時間。東京電力の鉄塔を過ぎたころより目標がおぼつかなくなるわ、雨は降ってくるわ。川中島合戦のときは戦況を伝えるのろし台にも使われたとされる正城山付近においてはみな無口。このあたりが芝原地区との境。ここから里に向かって下りる。更級小学校の学有林、さら



## 冠着山の尾根を伝って

に、かしゃつば池を経て初回の境巡りは終了しました。

そして二回目は今年九月三日。一回目の方向とは逆に冠着山頂から西へ北へと境をたどります。午前の各区防災訓練を終えた後、午後一時に一本松峠に、各区それぞれトラックにて分乗して参集。だれかいわく「この人たち難民か」。

一台の車に十数人。これで坂井村、大池、羽尾、須坂、仙石と回るのだから、昨年にくらべたら楽なこと、境に近いところに沿って道路がある。



## 児抱岩の下では「永遠の鎮座」を祈願

所々で車を降りて説明。下の写真は古峠で、峠の由来の説明を受けている様子です。古峠から一本松峠を経て伝っていく境沿いにはユニークな呼び名のポイントがあります。馬落とし(昔の旅人は、愛馬に重い荷を載せてこの道を通りかかった際、幅が狭く疲れた愛馬は足を踏み外した。それでこの地名がつけられたのだろう)。覗き(今は雑木が茂り見通しが悪いが、御麓部落がよく見えるところ)。

さらには下って大池のマレット場の横を通り郷津に。この地籍には大量の湧き水があり、昔は御麓、原、新田地籍の飲水と農業用水に活用された。そして高速道路の姨捨サーピスエリア上り線の上に出る。このあたりについては大池出身の方がおり、大助かり。

後は代までほぼ日常で認識しているため問題なしと了承。ただ、地図上の境と現実との間には差があり、入り込んだ境もあった。大字羽尾境巡りを踏破し終えた後の慰労会は満足感いっぱいビールと冷えた日本酒のうまかったこといまだに忘れません。(羽尾第五区長 中澤厚)

# おらほの冠着

15

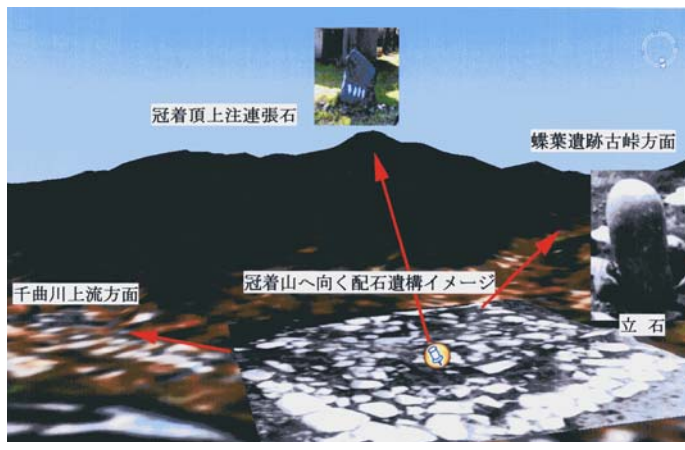
冠着山の頂上に注連張石（別名石尊大権現）という立石がある。古来、霊石として冠着神社の祭典と一緒に奉祀されている。この立石と羽尾の幅田遺跡から出土した縄文時代の遺構には密接なつながりがあると私は考えている。

## 冠着と一体だった縄文集落

幅田遺跡は縄文時代中期の縄文集落で、ここにも大きな立石がある。昭和三十八年（一九六三）の発掘で見つかった配石遺構の中にある高さ四十センチ、直径二十センチほどの棒状の自然石だ。

配石遺構は一边が二・四メートルの正確な正方形であり、全国でも珍しいとされるが、この遺構が冠着山の頂上にピタリと照準を合わせ、あの注連張石と対面している。つまりこの配石遺構は冠着山と一体となっているのだ。

立石は墓場にあることが多い。縄文人は立石を男根石に見立て、立石から死者の霊を送り、再び現世に生まれ帰ると信じていた。男性器に秘められた旺盛な生成力により、邪霊の侵入を防ぐとも考えた。各集落の入口によく見かける道祖神の原形とも考えられる。



縄文まつりが行われるさらしな里古代体験パークの脇を流れる雄沢川の源流近くには、縄文時代中期初頭の採集拠点であった標葉遺跡がある。そう、幅田遺跡のご先祖様が来たと考えられるところだ。彼らは雄沢川沿いなどにトチ、ドンぐりの木を植え、実を水にさらして灰汁を抜

く技術を伝え、安定した食料の確保ができるようになっていったのだ。長野市七二会地区に見事なトチの木（樹齢千三百年、周囲一二メートル）がある。縄文時代にもこんな巨木が、二ヨキ二ヨキ育ち、たくさんの実が採れたのではないだろうか。トチの花からは蜂が蜜をたくさん取り出す。トチ餅につけて食すると、たまらなくおいしい。

幅田遺跡の立石のそばには、埋められた甕があった。幼くして亡くなった子どもを埋葬し、この立石より信仰の山であった冠着山の嶺より死者の国へ英霊を送り、また再生を願った。やがて新しい生命がやどり、その赤ん坊の胎盤を甕に埋めて埋設した。村人たちはこの甕を踏めば踏むほど、丈夫な子どもに育つと信じ、「男根石」に祈った。こうした精神性がやがて立石を厄除け、五穀豊穡、子孫繁栄の神とし、道祖神にもなったのだろう。

とここで、この配石遺構の中央に炉があり、その周りからは使い古し破損した土器や石鏃、凹み石、石皿、打製石斧、動物の骨、人骨などおびただしい物が出土している。床面は真っ赤な焼土となっており、明らかに祭祀遺構である。冠着山の恵みで生活の糧になったものを赤々と立ち上る炎に投げ込み、再生を願う山の神に贈ったのではないだろうか。いまの「どんどん焼き」の原形か。

縄文時代は幅田遺跡の近くを千曲川が流れていた。小魚だけでなく秋は鮭、マスが捕れた。記録によると、明治二十四年に信濃川全域で一〇五〇トの漁獲高があった。最近までこんなに捕れたのだから縄文時代は雄沢川にも大群が……。想像しただけでワクワク。（大橋静雄）

（編集後記）さらしな里友の会、だよりの秋号は、縄文まつりの当日に合わせて発行しています。ことしの第十四回は地元更級小学校の全児童が参加する記念すべきまつりとなりました。トップページでは、子どもたちがまつりに向けて取り組んできた「ふるさと学習」の姿を写真で紹介しました。

境巡りは羽尾だけでなく山のある若宮、芝原地区でも同様に行われています。冠着山の尾根伝いには今も道が残っており、なかなか面白いコースです。ほかの市町村でも境巡りは行われているのでしょうか。

更級村初代村長の塚田雅丈さんは、更級小の名付け親と言ってもらっています。更級村の名は昭和三十年の合併でなくなり、更級郡の郡名も大岡村が長野市に一年合併し行政区画名としては消滅しました。更級小の校名はそれだけに貴重です。友の会だより創刊号から毎回、「おらほの冠着」をお書きいただいた塚田哲男さんは、農作業中の事故で現在、療養中です。代わって羽尾三島にお住まいの大橋静雄さんにお願いました。大橋さんは文中にありますが、幅田遺跡の発掘に高校生のお子さんが携わった方です。それだけに考察と併用の写真図解も大橋さんがお作りになったものです。

編集・発行  
さらしな里友の会より編集委員会  
事務局 さらしな里歴史資料館  
〒三八九・〇八二二  
長野県千曲市大字羽尾 四七の一  
電話 〇二六（二七六）七五二一  
ファクス 〇二六（二六二）四一六一